

'86 文化講演会 No.6

——現代を透視するために——

『自己をめぐる諸問題』

講師： ^き木 ^{むら}村 ^{びん}敏 先生
(京都大学医学部教授・精神病理学)



9月13日(土) P.M.3:30～5:30

於 河合塾 千種校SDPホール

〔主催〕 河合文化教育研究所

17 世紀にデカルトが、深刻な懐疑をかさねた結果到達した《われ思うゆえにわれあり》という結論は、3 世紀後のわれわれにとっては、さらに懐疑をつきつめるための出発点でしかないように思われます。《われ》とは何なのか、われわれがものを考えるとき《われ思う》といっているのはどうしてなのか、《われ》という代名詞で呼びうるような《自己》とか《自我》とか、その《同一性》とかが疑問の余地のない自明なもののように思われるのは、はたして錯覚ではないのか、錯覚だとすれば、この錯覚はわれわれが生きてゆく上でどのような意味をもっているのか、こういった数々の疑問が、特に前世紀末以来の百年間、思想界を大きく動かしてきました。

フッサールからハイデッガーへ、そして現代のポスト構造主義思想へと展開してきた現象学の流れも、わが国の西田・田辺の哲学も、結局は《われ》の存在をめぐる思案であったということが出来ます。一方、分裂病その他の精神病が、病気としては脳の変化という形をとりながら、その本質においては複雑な人間関係のなかでの《自己》の保全にかかわる危機的な事態であることも、この百年間にますます明白になってきました。精神病の発病には至らなくとも、現代の若者たちのあいだには《自己》や《自己同一性》をめぐる懐疑に苦しんでいる人が無数にいるはずで

さらに、日本語と西洋の言語との人称代名詞の用法からもわかるように、《われ》とか《自己》とかの促えかたには文化による大きな差異があります。

ドイツに住んでいたころ、友人のドイツ人がこんな話をしてくれた。彼がごく親しくしていた日本人の哲学者といっしょにレストランで食事をしたとき、この日本人は料理が気に入らず、「これはわれわれ日本人の口には合わない」と言った。そこで議論好きの彼は、変なこと言うなよ、味覚ってのは、まったく個人的な好みのもなんだぜ、「われわれ日本人の口には」なんて言いぐさがあるかい、といってこの日本人哲学者に喰ってかかったというのである。

なぜ彼が私にこんな話を持ち出したかという、私自身その当時、彼との個人的な会話のなかでも、公の席での講演などのなかでも、この「われわれ日本人」という表現を、知らず識らずの間によく用いていたのに、彼が気付いていたからである。

彼はそれから、急に真剣な顔になってこういった。「ぼくは日本人の友人をたくさん持っているし、日本が大好きだ。日本人の考え方も、なんとなくわかっているつもりだ。そこへ君たちがやって来て、われわれ日本人は、と切り出されると、なんだか、お前たちにはわかるものか、日本人は特別なんだ、われわれ日本人はお前たち西洋人とはわけが違うんだ、という宣告を叩きつけられたような気持ちになって、なんともやり切れないほど寂しい。」

それ以来、私たちは数回にわたってこの問題について語り合った。日本と西洋という問題を真剣に考えていた日本人の友人とも、同じような話題でいろいろと議論もした。私にはなにかしらこの問題のなかには、日本人の「精神構造」といわれるものにとつての、かなり本質的な核心が含まれているように思えてならなかったからである。

「人と人との間」より

受験に勝利するための秘訣は、何よりもまず受験という事態を自らの中で対象化してしまうことである。さらに、その受験に立ち向かう自分自身の姿を対象化してしまうことである。さらには現代という私達が生きている時代を透視してしまうことである。時代と自分とを読みとってしまうことが、実のところ何にもまして受験生に必要な不可欠の作業なのである。つまり、自分自身の生き方の座標軸と原点を設定し、受験という事態をその座標軸の中に位置づけてしまうことが必要なのだ。無論、時代と自分とを読みとるなどという作業は、容易になし遂げえぬことである。誰もが混迷する時代の中に自分の姿を正確にとらえることなく流浪していると言ってもよい状況なのだから。しかし、かと言って密閉された受験世界などという空間に自らを閉じ込めてはならない。うごめき続ける現代に果敢に身を投じようとする姿勢こそが、無限に学力を向上させる糧となるはずである。文化講演会は、そうした姿勢を形成するための場である、と私達は位置づけている。多数の参加を請う。